第 2 節　エジプトの言語政治とイスラーム

エジプト：その社会言語学的様態と言語政治への導入

以上、イスラエル・パレスチナ人、およびイスラエル・ユダヤ人の社会言語学的な様態について、Benor（2012）、Deshen（1993）、Gafter（2016）、アジェージュ（2018 [1992, 2000, 2008]）、Horner and Weber（2018 [2012]）、Lefkowitz（2004）、Spolsky（2014）、Spolsky and Shohamy（1999）、Shohamy and Kanza（2009）、Versteegh（2014 [1997]）、そして特にHarshav（1990, 1999 [1993]）を適宜、参照・引用して概説した。ここでレヴァント地域に関する社会言語学的調査・分析の導入を終え、次に、上でも示唆したように、ジェンダー偏差、そしてそのような偏差が示される背景を成す（クルアーン／近代標準）正則アラビア語、俗語（都市／地方）アラビア語が織り成す社会言語学的布置について、Haeri（2003: 2-3, 9-11, 19, 43-47, 67, 120-121, 134-140, 150-157）、およびBassiouney（2009: 19, 104, 199）、Versteegh（2014 [1997]: 168-169, 250-252）などに基づき、特にエジプトでの社会言語学的な様態に焦点を当てて概観する。

始めに、いくつかの基本的事項を押さえておこう。正則／標準アラビア語は、アラブ諸国において、宗教の言語であるだけでなく国家の公用語でもある。他方、俗語（口語）アラビア語は、地域的な変異が大きいが、それぞれの間の相違は、一般に、正則／標準アラビア語と俗語（口語）アラビア語との相違ほどには大きくない。もちろん、俗語アラビア語には、たとえばエジプトのような1つの国家の中で、階級、住居地、都会／地方、学歴、学校の種類（公立／私立）、ジェンダーなどを始めとするコンテクスト的諸因によって多様な変異が見られ、普通、それらの多様な俗語変種のうちの1つ（エジプトなどでは都市変種、湾岸地域では王室の用いる変種など）が、その他の俗語変種に影響を与える優勢な変種となっている。

エジプトの場合は、既に前章でも触れたように、カイロ変種が最も顕在的な

威信を持つものとなっており、また、カイロ方言を頂点とするエジプト俗語アラビア語は、口頭でのコミュニケーションに関してはアラブ世界の事実上のリンガ・フランカとなっている[322]。実際、エジプト俗語アラビア語には、アラブ世界におけるエジプトの独自性もあり、エジプト人のショーヴィニズム、国民主義（ワタニーヤ; waṭaniyya）、地域ナショナリズム（'iqlīmiyya）との結びつきが見受けられる。そして、汎アラブ主義（カウミーヤ; qawmiyya）などの枠組みではアラブ世界の公式のリンガ・フランカとされている正則アラビア語への潜在的な脅威としてエジプト俗語アラビア語が見なされることさえあるという（Versteegh, 2014 [1997]: 250-251）。

Versteegh（2014 [1997]: 168-169）によれば、エジプトだけでなく、他のアラビア語圏でも、書かれた方言が広く見られるようになってきていることは明らかであるが、それでもエジプトのケースは特記に値するものとなっている。エジプトでは、19世紀末に最初の書記方言の実験的試みが為された後、文芸、特に演劇における方言の使用について1960年代に激烈な議論が交わされ、その後、方言は文芸の媒介言語としてほぼ受け入れられるようになっているようである。2000年代中葉の報告によると、少なくとも2つの雑誌（ニュース月刊誌*Barti*と週刊誌*iḍḥak li-d-Dunyā*）が俗語での記事を定期的に出版するエジプトのメディアの事例として挙げられている。俗語の使用は演劇だけでなく、自伝、小説、そして解説的な散文でさえ一般的となっている。他方、たとえばモロッコでは一時期、モロッコ俗語アラビア語を用いた3つの雑誌（*Ḫbar bladna*、*al-'Amal*、*Nichane*）が出版されており、その内の2誌では基本的に俗語が使用されていた。しかし、多年に亘る出版の後、これらの雑誌は2010年代初頭に廃刊されており、その理由の1つは、俗語に対する関心や威信の欠如に求められている。実際、モロッコの王のことばを俗語で引用した論説記事の著者が不敬罪で逮捕されたこともあったという。

すなわち、Versteegh（2014 [1997]: 251-252）が示唆するとおり、全てのアラブ諸国のうちでエジプトは最も俗語アラビア語を目立って用いる傾向の強い社会になっている。エジプトは、エジプト・アイデンティティの確立を目指す地

322 巻末注53参照。

域ナショナリズムが顕著に見られる国民国家であり、その地域ナショナリズムにおいてエジプトの俗語アラビア語が重要な要素となっているのである[323]。たとえば、エジプトの人民議会（国会）での演説は、しばしば口語に近いようなスタイルで為され、これは他のアラブ諸国では見られないものである。もちろんエジプトも含めアラブ諸国においては、少なくとも公共圏における宗教的ドメインでは、常に（クルアーンの言語である）正則アラビア語のみが用いられるべきであると考えられており、私的な領域でも宗教的なトピックや文脈は正則アラビア語に向けてスタイルを上昇させる効果を持つ。しかし、エジプトにおいては、イスラーム学者たちでさえ、宗教的な事柄について俗語で話すことを問題視しない傾向が見受けられる。実際、エジプトでは、正則アラビア語だけが排他的に用いられがちなこのドメインにおいても、俗語が益々用いられるようになっていっているようである。公的な説教のような宗教的教導の場面でも、イスラーム世界の中の非アラビア語圏（東南アジアなど）で俗語（たとえばマレー語）が宗教的教導に用いられるのと似たような仕方で、クルアーンやハディース（聖伝集；預言者ムハンマドの言行録[324]）の文章の意味を明示するために、エジプト俗語アラビア語がしばしば使われることが観察されている。

---

323 鈴木（2012: 294-295; 四角括弧内は引用者による）などにも次のように述べられている：

> エジプト人は比較的、口語を公的空間に持ち込みやすいように見える。これは対外的には、アラブ圏内における自国の国力や文化的影響力（映画・TVドラマ・歌謡・教員等の輸出）に対する自信の表れと解釈できるかもしれない。また対内的にも【…中略…】地理的・歴史的条件から、他地域とは区別されたエジプト人意識が古くから育まれ、エジプト方言がそれを強化している。とくに近代、独立した政治単位となるのが早かった点は大きい。19世紀から、文語文芸復興を経験する一方で、ジャーナリズムや翻訳文学などにおける口語使用の実験も行われた。

324 ハディース（「語り」の意）は、9世紀から10世紀初頭にかけて、ムハンマドが生前に弟子たちに語ったことば、および、さまざまな状況に応じて行ったとされる伝承が編集されたものである。「異本」のごときものが存在しないクルアーンとは異なり（小山・浅井、2022: 31-36）、ハディースには、ブハーリー（Muḥammad al-Buḫārī, 810～870年）による『真正集』など、複数の編者による多くのハディース集の存在が知られている。